



第1回 高知女子大学看護学会

あ い さ つ

高知女子大学看護学会会長

和 井 兼 尾

長い間の念願でありました、高知女子大学看護学会を、160余名の賛同を得まして、発足の運びとなりまして、本日60余名の会員の出席のもとに、発会式、並びに第1回学会を開催できましたことは、大変嬉しいことでございます。女子大学に看護学科が誕生して24年21回、400余名の卒業者を社会に送っております。おそきに過ぎた憾みはありますが、兎に角今日に至りましたことは、看護の発展の上に深い意義を持つことを喜ぶものであります。

私が只今この席に臨んで考えましたことは昭和27年高知女子大学に、日本で初めて看護学科を創設された当時の看護界の動きを想起し、改めて大きな感動を受けております。その頃の日本は敗戦後の社会秩序はまだ回復途上の混乱期でありました。看護界でも新制度（昭和23年制定された、保助看法）へ切り換への時期でありました。保健医療施設は勿論、教育施設においても、量・質ともに極めて貧弱なものでありました。従って、看護教育を新しい大学課程に導入するについても、看護が「学」として成立するであろうか……大学課程の専門教育科目に、何を、どう整理し枠組みするか、等々問はれておりました。

また看護の実践場面にあっても、新しい看護業務へ改善のため看護職の先輩諸姉は、精一杯の努力をしております、まだ本格的な看護研究にとり組む人は少なく、また発表の場も少なく、まことに厳しい時期でございました。

昭和35年、医療問題再検討のため、厚生大臣の諮問機関として組織された、医療制度調査会の審議の中で、看護問題が検討され、看護の問題点が指摘されましたが、特に看護教育については、医療の近代化に対応し、また看護の専門職業として質的向上のため、教育制度、内容の改善、特に養成教育については看護教育振興のために教育機関を学校教育法上の学校（大学・短大等）とする具体的方策を検討する必要性を厚生大臣に答申されております。（昭和38年3月）

その頃から看護界でも漸やく教育の大学化への声が出るようになり、また看護制度改正への動きが活発になったと、記憶しております。（その頃、看護大学は2、看護短大5校でした。）

それに相前後した頃から熱心な先輩諸氏によって、研究活動は活発に行なわれるようになり、日本看護協会の各部会の事業として、看護研究学会を持つようになりました。その後昭和45年頃からでしたか、協会は、この学会を本協会の事業として運営、近い将来学術学会として、公認される方向に高めてゆこうと、内容の充実をはかり現在に至ったことは周知のとおりであります。ここ数年来優れた研究者が続出しておりますことは、隔世の感がございます。

そこで、我々女子大学看護学会としても、この看護界の動きは、おくれではおられません。卒業者の70%以上が、病院・保健所・学校・地域等、広く看護の専門分野に活動しております。会員の皆さんが広く緊密な連絡を持ち、日常の実践活動の中から、看護の科学的解明と実証を認め、討議を重ね、看護学確立への努力をなさしまして、この学会を権威あるものに発展させて頂くことを強く願うものであります。願わくは未加入の方々の加入を期待しております。

終りに、この学会発足のために当初から大変御尽力くださいました準備委員の諸氏の御労苦に対し心から感謝します。

以　　上